

## 第二百十一話 悪意と偏見に満ちた敵国家・国民分析

「連合国の太平洋戦争」（松岡祥治郎 文芸社刊）を読んで、気になったのは、偏見と悪意に満ちた敵国人に関する分析結果は、とんでもない邪悪な残虐行為を生み出すことがあるということだ。敵愾心を昂揚することは必要だが、過ぎたるは及ばざるが如しだ。同書から関係部分を要約抜粋する。

### 1 敵を知る努力

孫子「謀攻篇」の有名な句「知彼知己、百戦不殆。不知彼而知己、一勝一負。不知彼不知己、每戦必敗」ではないが、戦いの相手を知ることは重要である。敵を知る一環としての敵国の国民性、性格等々の研究は重要である。米国は、それを学者を総動員し、組織的に行った。

### 2 米国の日本(民族、国家、人)分析

1944年1月、ニューヨークタイムスが、所謂「バターン死の行進」を報道すると日本人の残虐物語が溢れ出したと云われる。これを米国 OWI(戦時情報局、人類学、心理学、行動科学等の敵国民性研究をも担当していた組織)の文化人類学者の研究が後押しした。

真珠湾攻撃直後から、資料研究のみならず、捕虜聞き取り、戦地接収の各種資料等々を駆使して、研究が行われた。特に「日本人の性格構造」(ジェフリー・ゴアラ)は学者にもマスコミにも多大な影響を与えた。日本人は原始的部族、徹底した用便の躰を通して日本人の幼児性、原始性、攻撃性を説明した。集団的な神経症の国民、・・・等々

日本に対して温かい目を持っていた学者でさえ、ゴアラの研究を敷衍し、日本兵の途方もない残虐な行動は日本人男性の性格構造の所為だとした。彼の「菊と刀」で有名なベネディクトも OWI の一員であった。研究成果は詳らかではないが、菊と刀に凝縮されているのだろうか?

これらの研究成果が対日政策に影響を与えたか否かは不明とされるが、軍人や一般大衆に多大なる影響を与えたことは想像に難くない。「文明以前の暗黒時代の残忍な生き物」「ジャングルの生き物」「神道は邪悪で血腥い悪霊学」「忽ち残忍な野蛮人と化する人種的背景」「あと二インチ背が高かったら真珠湾攻撃は無かつたろう」(同書 204~208p)

### 3 日本分析論の弊害：残虐行為の正当化

投降無防備な日本兵を軽機関銃で大量射殺、虐殺を事故と報告、日本の投降兵を受け入れず死体の山を、捕虜日本兵を飛行機から放り出した、投降兵を解放し逃げるところを狙い撃ち等、病院を破壊し、救命ボートを機銃掃射し、敵の民間人を虐待・殺害し、傷ついた兵士を殺し、まだ意気のある者を他の死体と共に煮て骸骨をとりわけ、それで置き物を作るとか、又は他の骨でペーパーナイフを作るとかした。彼のリンドバークも、その日記に「敵を殺して捕虜にしないというのが一般的な空気・・・拷問によって日本兵を殺害し、遺体を爆弾穴に投げ込んだうえ、トラック一台分の残飯や廃物で埋もれさせた。」と書いた。

書くのも嫌になるので、ここらで止める。それにしても、何故人間は斯くも残虐になれるのだろうか?平素は常識人で立派な紳士であっても、残念ながら、戦場という過酷な環境では変貌し得る。それが現実だとしても、それを克服できるところが人間の人間たる由縁だと思うし、そうであるべく軍紀を維持する為にも所要の教育が必要である。

相手が憎いからと言って、相手を邪悪な獣視し、全てが許されると勘違いさせるような研究は百害あって一利なしだ。

戦後 75 年を経た現在でも、彼等の潜在意識に沈殿していないか?悍ましい悪魔が時折顔を出しはしないか?

(第二百十一話 了)

